広島大学心理学研究　第6号　2006

保育者省察尺度に関する探索的研究（2）

—省察の3層モデルによる検討—

杉村伸一郎・朴　信永・若林紀乃

Exploratory research on a reflection scale for kindergarten and nursery teachers (2) : Study about a 3-layer model for reflection

Shinichiro Sugimura, Shin-Young Park, and Sumino Wakabayashi

保育における省察の構造を明らかにするために，省察の3層モデルに基づき質問項目を作成し，保育者 118 名に実施した。因子分析の結果，自分自身に関する省察と他者をとおした省察は1因子構造，子どもに関する省察は2因子構造が妥当であると考えられた。因子分析の結果に基づいて作成された保育者の省察に関する4つの下位尺度と，自己意識・自己内省尺度や保育者の日常に関する項目との相関は低かった。しかし，各質問項目の平均値は，3つの層によって異なる傾向があり，今後，2因子や3因子構造を再検討する必要があると考えられた。

キーワード：保育者，省察，反省的実践

問題と目的

保育者の実践と成長において省察は重要な役割を果たすと考えられている（津守，1980；若林・杉村，2005）。しかしながら現在のところ，保育者の省察を測定する尺度もなく，省察の構造や機能に関する実証的研究はほとんどない。そこで，杉村・朴・若林（印刷中）は，保育における省察尺度を開発するために，自分自身，子ども，他者という省察の対象別に，行動，感情，認知の3つの側面に分けて質問項目作成した。しかし，因子分析の結果，保育者自身に関する項目では，一部，感情と認知がまとまりとして分かれたものの，子どもに関する項目では，行動，感情，認知というまとまりは見られなかった。

そこで，本研究では，行動，感情，認知という省察の内容ではなく，行為前，行為中，行為後といった省察の時期によって項目を分類し選択することにした。その際，朴・杉村（2006）の省察の3層モデルを参考にした。省察の3層モデルは，子育てにおける親の省察に関するモデルではあるが，保育者の省察と親の省察には多くの共通点があり，その過程も類似していると考えたからである。

保育者における省察の3層モデルを図1に示す。このモデルでは，日常の出来事を「外的情報」とよび，判断材料となる情報の違いが明らかになるように，「外的情報」を，保育者自身の態度や言動といった「保育者自身に関する情報」，自分の担当している子どもの表情や行動といった「自分の担当している子ども

に関する情報」，他の保育者の子どもへの接し方や他の子どもの様子といった「他の保育者や子どもに関する情報」の３つに分けて考える。さらに，カンファレンス等の集団討議における省察を扱えるように，「他者との交流」をモデル上に描き加えた。

そして，「外的情報」に対する「注意・制御」と「知覚」を含む循環的な過程を「１次的省察」，その過程において産出されるものを「気づき」とよぶことにした。「気づき」は産物であるとともに，次の過程において思考の対象になる可能性があるので「１次的情報」となる。そして，「気づき」に対する「分析・評価」と「計画・予測」を含む循環的な過程を「２次的省察」，その過程において産出されるものを「個別的認識」とよぶ。さらに，「洞察・抽象化」と「見通し・具体化」を含む循環的な過程を「３次的省察」，その過程において産出されるものを「一般的認識」とよぶことにした。「一般的認識」は，通常，保育観，子ども観，発達観とよばれているものに相当する。

本研究では，以上のようなモデルに基づき，保育省察尺度の項目を作成する。具体的には，自分自身，子ども，他者という省察の対象別に，１次的省察，２次的省察，３次的省察に相当する項目を 12 項目ずつ作成する。その際，自分自身と子どもに関する省察については，省察の各レベルに対応した項目を４項目ずつ作成するが，他者に関しては，質問において３つのレベルを明確に区別することが困難である

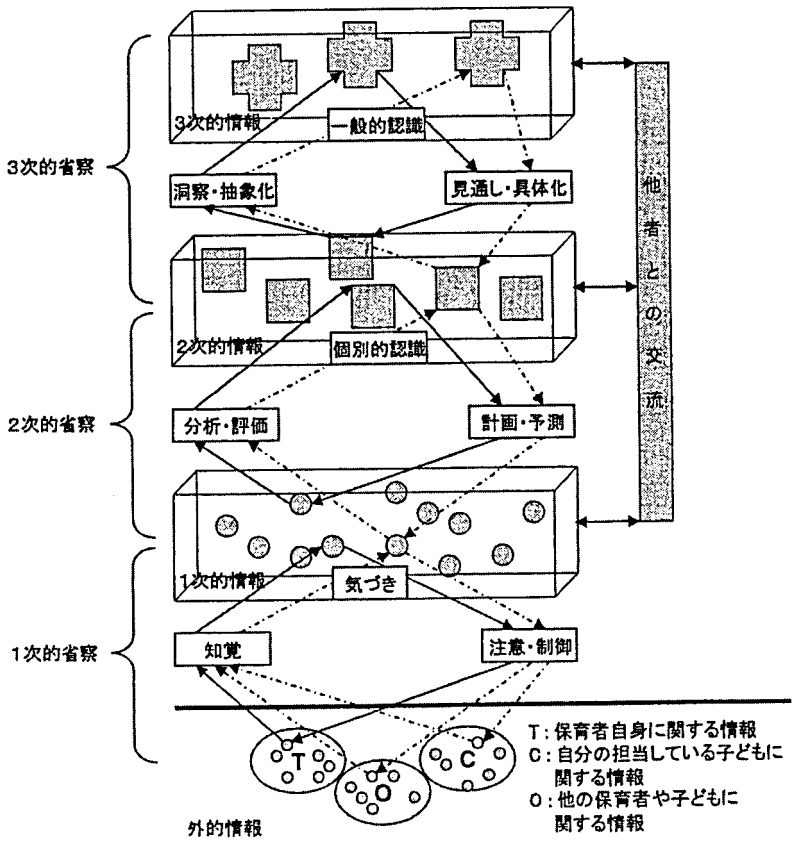

図1．省察の3層モデル（(朴・杉村，2006)を一部改変）

ので，他者に直接注意を向けたり見たりするレベルと，他者と話しをしたり他者の話を聞いたりするレベルで，4項目ずつ作成する。そして，他の一般的な省察に関する尺度（辻，2005の自己意識・自己内省尺度）との関連を調べ尺度の妥当性を確認する。さらに，保育観，指導方法，保育ストレス等もあわせて尋ね，保育省察尺度との関連を調べることにより，省察の機能を明らかにする。

方　法

対象者　分析の対象は広島市の公立の幼稚園に勤務する保育者118名であった。対象者の属性の詳細を表1に示した。

調査時期等　2006年12月上旬に各幼稚園に質問紙を郵送し，10日後までに返送を求めた。園単位での回収率は88.9%（24/27）で，保育者単位では70.2%（118/168）であった。

質問紙の内容　質問紙は，保育における省察に関する36項目，辻（2005）の自己意識・自己内省尺度の中から自己内省に関する6項目，自己反芻に関する5項目，内的状態の意識に関する4項目，そして，保育者の日常に関する9項目の，合計60項目から構成され，最初の頁に，性別，年齢，保育経験年数（産休・休職期間は除く），集団討議の経験等を尋ねるフェイスシートがつけられた。

結　果

本研究では，3－5歳児に対する日常の保育を想定して省察に関する項目を作成したため，以下

表1　調査対象者の属性

		群			合計
		3－5歳児担任	フリー・臨時	主任・園長	
人数（男，女）		73(0, 73)	30 (1, 29)	13(0, 12)	118(1, 116)
平均年齢（*SD*）		39.5(9.2)	35.4(9.4)	53.4(3.1)	40.0(10.1)
平均経験（*SD*）		16.5(11.6)	7.2(5.5)	31.2(3.7)	16.2(11.9)
免許（%）	保育士	0	0	0	0
	幼稚園	24 (32.9)	10 (34.5)	6 (46.2)	42 (35.9)
	両方	49 (67.1)	19 (65.5)	7 (53.8)	75 (64.1)
討議経験（%）	無	2 (3.2)	0	1 (7.7)	3 (2.8)
	1回	1 (1.6)	3 (10.7)	0	4 (3.8)
	数回	30 (47.6)	15 (53.6)	4 (30.8)	49 (46.2)
	定期	30 (47.6)	10 (35.7)	8 (61.5)	50 (47.2)
討議の場（%）	有	62 (89.9)	22 (78.6)	12 (100.0)	98 (88.3)
	無	7 (10.1)	6 (21.4)	0	13 (11.7)

注）「3－5歳担任」には副担任と補助，「フリー・臨時」には加配，「主任・園長」には副園長が含まれている。また，無記入があったため，合計の数が一致しない箇所がある。

の分析は，3－5歳児の担任である73名を対象に実施した。

尺度の構成　まず，保育における省察に関する36項目の平均値と標準偏差を算出した（表2，表3，表4）。各項目の平均値は，保育者自身に関する省察（TR）では，TR6，TR1，TR2，TR7などが高く，TR11，TR8，TR9などが低い。子どもに関する省察（CR）では，CR1，CR2，CR4などが高く，CR11，CR9，CR12などが低い。また，他者をとおした省察（OR）では，OR2，OR4が高く，OR7，OR3が低い。

次に，平均値±1 *SD*を基準に項目分析を行ったところ，天井効果やフロア効果は見られなかった。そこで，全ての項目を用いて，保育者自身に関する省察，子どもに関する省察，他者をとおした省察，に分けて主因子法による因子分析を行った。

最初に，保育者自身に関する省察12項目に対して因子分析を行った。固有値の変化から1－3因子が妥当であると考えられたので，それぞれの場合を検討したが，「子どもとのやりとりの中で，はっと我に返る瞬間がある」という項目は，いずれの場合も，どの因子にも高い負荷量を示さず，また，自由記述において項目の意味がわかりにくいという指摘を受けていたので，除外することにした。

表2　保育者自身に関する省察の因子分析結果（3・4・5歳児担任）

分類	項目内容	負荷量	共通性	平均値	*SD*
3	TR 8「保育」とはどういうことか考えることがある	.83	.69	3.74	1.11
2	TR 3子どもと話した後，自分の言い方が適切かどうか考えることがある	.76	.58	4.11	0.83
3	TR11保育について自分の長所・短所を考えることがある	.74	.55	3.73	0.98
2	TR 6子どもに伝えたいことがあるとき，どのようにしたらうまく伝わるか考えることがある	.73	.54	4.47	0.65
2	TR 9子どもに何か言った後，そのときの自分の感情について考えることがある	.71	.50	3.79	0.91
3	TR12自分の保育の方針を振り返り改善すべきところを考えることがある	.69	.48	3.92	0.83
1	TR 7保育における自分の振る舞いに目を向けることがある	.67	.45	4.14	0.77
3	TR 4自分の長所・短所を踏まえながら保育を行っている	.62	.39	3.86	0.93
2	TR 5子どもに何か言う前に，自分の言動の影響を考えることがある	.58	.33	4.06	0.90
1	TR 1子どもに対する自分の言動に気をつけることがある	.48	.23	4.47	0.71
1	TR 2子どもと話すとき，自分の態度に注意を向けることがある	.47	.22	4.17	0.87
	因子寄与	4.96			
	寄与率(%)	45.09			

表3　子どもに関する省察の因子分析結果（3・4・5歳児担任，直接オブリミン回転後の因子パターン）

分類	項目内容	Ⅰ	Ⅱ	平均値	*SD*
3	CR11保育の出来事から「子ども」の本質について考えることがある	.91	-.34	3.46	1.07
2	CR 9子どもが1日の中でどう変わったか考えることがある	.79	-.02	3.52	1.09
2	CR 6あらかじめ子どもの行動や態度を予想しておくことがある	.62	.25	4.12	0.76
1	CR10子どもの話の中に子どもの感情を感じとることがある	.61	.26	4.12	0.78
3	CR12子どもにとって将来何が必要か考えながら育てている	.61	.08	3.89	0.95
3	CR 5子どもの発達について考えることがある	.59	.23	4.21	0.69
3	CR 7子どもの長所・短所を考えながら普段の行動を見ることがある	.52	.32	4.18	0.75
2	CR 8子どもをほめたり叱ったりした後，子どもがどのように受けとめたか考えることがある	.44	.13	4.29	0.77
2	CR 3子どもをほめたり叱ったりする前に，子どもの受けとめ方について考えることがある	.35	.32	4.19	0.79
1	CR 4子どもと一緒にいるとき，子どもの行動に注意を向けることがある。	.06	.79	4.58	0.55
1	CR 1子どもと話しているとき，子どもの表情や態度に注意することがある	.02	.77	4.65	0.53
1	CR 2子どもの言動に気をつけている	.09	.64	4.62	0.54
	因子間相関	Ⅰ	Ⅱ		
	Ⅰ	－	.50		

改めて保育者自身に関する11項目に対して因子分析を行ったところ，固有値の変化(5.47, 1.58, 0.997, …）と因子の解釈可能性を考慮すると，1因子構造が妥当であると考えられた。そこで，再度1因子を仮定して因子分析を行った（表2）。ちなみに，主因子法・オブリミン回転により2因子を抽出した場合は，TR2とTR1が第2因子において負荷量が高く，3因子の場合は，第2因子においてTR2とTR1が，第3因子においてTR5とTR4が負荷量が高かった。

同様に，子どもに関する12項目に対して因子分析を行った。固有値の変化（5.77, 1.42, 1.19, 0.71, …）と因子の解釈可能性を考慮すると，2因子構造が妥当であると考えられ，順に，「子ども考慮」「子ども注意」因子と命名した（表3参照，回転前の2因子の説明率は59.9%）。参考のために3因子を仮定して因子分析を行ったところ，第2因子ではCR1，CR4，CR2が，第3因子ではCR8，CR3が負荷量が高かった。

また，他者に関連する8項目に対して因子分析を行い，固有値の変化（4.40, 1.15, 0.70, …）と因子の解釈可能性から，1因子構造が妥当であると考えられた（表4）。ちなみに，主因子法・オブリミン回転により2因子を抽出した場合は，OR7とOR8が第2因子において負荷量が高く，3因子の場合は，第2因子においてOR7とOR8が，第3因子においてOR6とOR4が負荷量が高かった。

表4 他者との交流をとおした省察の因子分析結果（3・4・5歳児担任）

分類	項目内容	負荷量	共通性	平均値	*SD*
1	OR2他の人の保育をみて，今の自分の保育に必要なことに気づくことがある	.78	.61	3.99	0.85
2	OR1他人と子どもの話しをすることで，自分が担当している子どもの特徴に気づくことがある	.76	.58	3.66	0.96
2	OR5他の人と話しているうちに，保育に関する疑問が解決することがある	.75	.56	3.64	0.82
2	OR3他の人と保育の話をして，自分の保育の方針を改めることがある	.73	.54	3.58	0.94
1	OR6他の保育者が担当している子どもの言動を注意深く見ることがある	.68	.46	3.70	0.94
2	OR8いろいろな話を聞いて自分の子ども観を見直すことがある	.67	.46	3.59	0.83
1	OR4他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることがある	.61	.37	3.93	0.86
2	OR7子育てに関する本や雑誌を読み，自分の保育観と照らし合わせることがある	.57	.33	3.42	0.88
	因子寄与	3.90			
	寄与率(%)	48.74			

各尺度の得点　各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出することにより，各尺度の得点とした。また，内的整合性を検討するためにα係数を算出した。以上の結果を表5に示す。α係数はいずれも0.80以上であり，十分な値が得られた。平均値をみると，「子ども注意」が高く，「自己省察」，「子ども考慮」，「他者省察」の順に低くなっていた。

さらに，省察の程度に影響すると思われる保育の経験年数と討議経験との関連を調べた。経験年数に関しては，10年未満，10年以上20年未満，20年以上の3群に分けて，「保育や子どもに関する集団討議を，授業や研修の中でどの程度経験したことがありますか」という討議経験に関しては，数回以下の群と一定期間継続してある群に分けて，各尺度の平均値を算出した（表6参照）。「現在，通常の職員会議以外で，保育や子どもに関する集団討議の場がありますか」という質問に関しては，「ない」と答えた者が少なかったので，比較を行わなかった。保育経験年数に関して3つの群の平均値の差を検定するために分散分析を行ったところ，どの尺度においても有意な差は見られなかった。また，討議経験に関して2つの群の平均値について*t*検定を行ったところ，いずれの尺度においても得点差は有意ではなかった。

表5　3・4・5歳児担任の各尺度の平均値と標準偏差

	項目数	α係数	平均値	*SD*
自己省察	11	0.89	4.07	0.59
子ども考慮	9	0.88	3.99	0.62
子ども注意	3	0.81	4.62	0.46
他者省察	8	0.88	3.70	0.65

表6　3・4・5歳児担任の経験別の尺度平均値（3・4・5歳児担任）

	保育経験年数（平均値）			討議経験	
	10年未満	10年以上20年未満	20年以上	1回・数回	定期・継続
	28人（3.4年）	18人（15.3年）	27人（28.5年）	31人	30人
自己省察	4.08 (0.61)	4.17 (0.53)	3.99 (0.62)	4.20 (0.52)	4.04 (0.67)
子ども考慮	3.88 (0.66)	4.10 (0.62)	4.03 (0.59)	4.61 (0.50)	4.64 (0.48)
子ども注意	4.65 (0.53)	4.59 (0.37)	4.60 (0.45)	4.01 (0.58)	4.07 (0.71)
他者省察	3.79 (0.65)	3.74 (0.48)	3.57 (0.76)	3.74 (0.69)	3.72 (0.71)

尺度間相関　次に，保育省察尺度間の相関係数を表7に示す。省察の下位尺度間では有意な正の相関があり，特に，「自己省察」と「子ども考慮」との間は.78と高かった。また，保育省察尺度の妥当性を検討するために，辻（2005）の自己意識・自己内省尺度の下位尺度である自己内省尺度（α＝.79），自己反芻（α＝.88），内的状態の意識（α＝.74）との相関係数を算出したところ，有意な相関が示されたのは，「子ども考慮」と「自己内省」，「他者省察」と「意識」との間だけで，いずれも低い相関であった。

保育者の日常との関係　保育者の日常に関する項目と保育省察尺度ならびに自己意識・自己内省尺度との相関係数を表8に示す。保育省察尺度と有意な相関が見られたのは，「ポジティブ」「傾聴」「充実

表7　保育省察尺度間および自己内省・自己意識尺度との相関係数（3・4・5歳児担任）

	自己省察	子ども考慮	子ども注意	他者省察	自己内省	自己反芻	意識
自己省察	–	.78**	.46**	.68**	.22	–.20	–.12
子ども考慮		–	.57**	.66**	.31**	–.03	–.04
子ども注意			–	.37**	.10	–.02	–.02
他者省察				–	.18	–.13	–.27*

*p< .05,　** p< .01

表8　保育省察尺度ならびに自己内省・自己意識尺度と保育者の日常に関する項目との相関係数（3・4・5歳児担任）

	日記やブログ	自分の時間	熟考	ポジティブ	傾聴	ストレス	自信感	充実感	保育士継続
自己省察	–.08	.22	.24	.27*	.16	–.09	.06	.25*	.33**
子ども考慮	–.04	.23	.18	.20	.17	–.17	.07	.26*	.31**
子ども注意	–.05	.13	.19	.28*	.07	–.05	.12	.31**	.24*
他者省察	–.03	.21	.03	.25*	.29*	–.14	–.15	.11	.26*
自己内省	.19	.15	.48**	–.14	.01	–.03	–.23	–.03	–.07
自己反芻	–.04	–.02	.10	–.54**	–.10	.17	–.23	–.20	–.20
意識	.30*	.11	.36**	–.26*	–.10	.15	–.10	–.06	–.18

*p< .05,　** p< .01

感」「保育士継続」であり，いずれも低い相関であった。また，自己意識・自己内省尺度に関しては，「自己内省」と「熟考」が中程度の正の相関，「自己反芻」と「ポジティブ」との間が中程度の負の相関であった。

考　察

本研究では，省察の３層モデルに基づき，１次的省察，２次的省察，３次的省察という省察の各レベルに応じた項目を作成した。しかし，因子分析の結果，子どもに関する項目では，「子ども考慮」「子ども注意」という因子に分かれたものの，保育者自身と他者に関しては，想定した因子を抽出することができなかった。また，４つの下位尺度を構成し，妥当性を検討するために自己意識・自己内省尺度や保育者の日常に関する項目との相関係数を算出したところ，部分的に低い相関が示されたにとどまった。

しかしながら，項目の平均値を見ると，想定したレベルによって異なる傾向がある。また，保育者自身や他者の省察を１因子にしてしまうと，自分自身，子ども，他者という省察の対象間の省察得点の相関が高く，このままでは，それぞれの省察の働きを十分に捉えることは難しいであろう。今回は，保育者自身や他者をとおした省察において，２因子や３因子構造を仮定すると，尺度を構成するには項目数が少なくなるために，１因子構造を選択した。保育者の負担を考えると，全体の項目数を増やすことは困難なので，今後の可能な選択肢は，各項目を省察の３つのレベルにより対応したものになるように洗練することだと考えられる。

次に，省察の下位尺度の平均値をみると，子どもに関する省察の下位尺度が最も高く，保育者自身に関する省察，他者をとおした省察の下位尺度，の順に低くなっていた。日常，保育士同士が雑談の中で子どもの話をしている姿がよくみられる。しかし，自らの保育や互いの保育の話をする姿はなかなかみることができない。今回の結果，およびこれらの日常の保育士の姿から考えると，保育士にとって，子ども側の行為を客観視することは容易であるものの，大人側の行為を客観視し省みる作業は困難であるといえよう。

また，下位尺度の得点に関しては，個々の保育者を調べると，他者省察の得点が他の尺度の得点よりも高い場合もあるかもしれない。さらに，同じ子どもに関する省察でも，尺度平均値では，「子ども考慮」が「子ども注意」よりも低い。しかし，個々の保育者の得点を調べると，「子ども注意」よりも「子ども考慮」の得点が高い人がいるかもしれない。今回は，対象者が少なかったために十分な分析ができなかったが，今後，このような個人差に着目した研究も重要になるであろう。

保育省察尺度と保育者の日常に関する項目との関連は，省察の対象として，自分自身，子ども，他者という分類は，杉村・朴・若林（印刷中）と同じであったにもかかわらず，異なった結果であった。具体的には，「熟考」「ストレス」は，先行研究では有意な中程度の相関が示されたが，本研究では低い相関であり，そのかわりに，「ポジティブ」「傾聴」「充実感」「保育士継続」で相関が有意であった。現段階では，２つの調査の結果の違いの原因と考えられるのは，尺度を構成している項目や調査地域の違いであり，後者に関しては，以下のようなことが考えられる。

先行研究での調査対象は，過疎を乗り越えるため合併等を行ってきた地域の保育者である。そのため，振り返る行為はそのまま今後の自らの地域や保育を心配し熟考することにつながっていると考えられる。

一方，本研究での調査対象は，全国の中でも，主要都市として確立し，ある程度の教育的力量が認められてきた地域の保育者である。そのため，自らの保育を振り返る行為は，今後への不安へつながるというよりむしろ，向上していく自分を見据えたものとなっていると考えられる。このような地域による差を考えたとき，省察の普遍的な機能の再検討が必要になる。その際，省察が普遍的なものではなく，省察をする個人の背景が省察行為の質を変えてしまう可能性があることも念頭におくべきであろう。

また，保育の経験年数と省察の程度との関連についても，２つの調査で異なった結果であり，先行研究では，「変化察知」では，10年未満群の得点が10年以上20年未満群の得点に比べて有意に低いこと，「情報利用」では，10年未満群の得点が20年以上群の得点にに比べて有意に低いことが明らかになったが，本研究では，下位尺度に間で，保育経験年数による違いはなかった。保育者の日常に関する項目と同様に，２つの調査で，省察の尺度も対象の属性も異なるので，現時点では，原因を特定することは困難である。今後，保育者の省察尺度の開発とともに，省察の個人差や経験による変化を一層詳しく検討し，保育者の支援に役立てていきたい。

引用文献

朴信永・杉村伸一郎（2006）．子育てにおける親の省察モデルの検討　広島大学大学院教育学研究科紀要第三部，55，373-381.

朴信永・杉村伸一郎（印刷中）．親の省察尺度の作成に関する予備的研究　幼年教育研究年報，29.

杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃（印刷中）．保育者省察尺度に関する探索的研究（１）　―保育現場における反省的実践―　幼年教育研究年報，29.

辻平治郎（2005）．森田療法における自己意識・自己内省の概念と測定　梶田叡一（編）自己意識研究の現在２　ナカニシヤ出版　pp.119-134.

津守 真（1980）．保育の体験と思索　-子どもの世界の探究-　大日本図書

若林紀乃・杉村伸一郎（2005）．保育カンファレンスにおける知の再構築　広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部（教育人間科学関連領域），5，369-378.

謝　辞

本研究にご協力を賜りました幼稚園の園長先生をはじめ保育者の皆様に深く感謝申し上げます。